

March / April  
2021 No.10

A News letter from SCGO-JSOG Project  
on Women's Health and Cervical Cancer

# カンボジア 女性のヘルスプロモーションを通じた 包括的子宮頸がんサービスの 質の改善プロジェクト

JICA 草の根技術協力事業(草の根パートナー型)

PROJECT FOR IMPROVING THE QUALITY OF  
COMPREHENSIVE SERVICES FOR CERVICAL CANCER

## カンボジア産婦人科学会ウェブサイト掲載情報の拡充

昨年度より、カンボジア産婦人科学会(SCGO)ウェブサイトの整備を進めています。以前のサイトは、主に学会員向け情報が提供されており、一般女性向け情報は少なく、またわかりにくい場所にありました。昨年10月頃、日本産科婦人科学会サイト等を見本として「一般女性向けページ」がトップページに設置され、健康教育教材などがよりわかりやすく掲示されるようになりました。この度、SCGOにより、以下のさらなる改善が行われました。

- ① トップページ: 既存の子宮頸がん検診啓発ビデオの掲載、ウェブサイト閲覧数カウンターの設置、教育省関係者への啓発会合報告の掲載(2月開催)
- ② 各対象者向け情報ページ: 掲載情報の拡充(一般女性向け情報2点、医療従事者向け情報12点)

### ① トップページ



### ② 一般女性向け情報ページ 赤枠が更新情報



新型コロナウイルス感染症の市中感染拡大に伴うプノンペン市のロックダウンにより、対面での健康教育等は困難な状況が続いています。そういった今だからこそ、非接触で情報を届けることのできる手段の一つである SCGO ウェブサイトが、より多くの一般女性にとって有用な情報源となるよう、今後も改善への支援をしていきたいと思えます。

SCGO ウェブサイト URL: <http://scgo-kh.com/>

(国立国際医療研究センター 菊池 識乃)

## 第73回日本産科婦人科学会学術講演会でのポスター発表

4月22-25日にハイブリッドで実施された第73回日本産科婦人科学会学術講演会において、カンボジア産婦人科学会の Sann Chansoeung(スン)理事と国立母子保健センターの Sovanara Hang(ソバナラ)医師がポスター提出を行いました。

スン理事は、” Knowledge, Attitude, and Practice Towards Cervical Cancer Among Primary School Female Teachers in Phnom Penh”と題して、プノンペン市内の小学校女性教員100名を対象に実施した、子宮頸がん検診知識、態度、実践に関する調査の結果を報告しました。本調査で判明した重要な点の一つは、手洗いなど基本的衛生については、小学校教員のほとんどが十分な知識があり児童に教える自信も高いと回答した一方、女性の身体や子宮頸がんについては、教員の8割が知識、自信ともになかったことでした。小学校女性教員の多くは子宮頸がん検診について聞いたことはありましたが、過去子宮頸がん検診歴があったのは約半数でした。また今後検診に参加する意思がないと回答した女性の検診しない理由は、恥ずかしい、怖い、忙しい、必要ない、効果がないなどでした。本調査の結果を基に、小学校女性教員を対象とした子宮頸がん検診受診を促進するための健康教育プログラムの開発を行っています。

ソバナラ医師は、” Magnitude and predictors for non-collection of cervical cytology results at a national hospital in Phnom Penh”と題し、国立母子保健センターで2018-2019年に細胞診を受けた1005例のフォローアップ状況を調べた横断研究の結果の発表を行いました。同センターは、子宮頸部細胞診を実施し院内で検査結果を出すことのできるカンボジアでは数少ない国立病院の一つですが(国の検診プログラムは酢酸を用いた視診VIAで実施されています)、実際の臨床での問題として「そもそも細胞診結果を取りに来ない患者が多い」という問題が挙げられたという背景があります。調べてみた結果、3割もの女性が結果を取りに来ていないこと、うち15.4%は細胞診陽性で精査が必要な症例であったことなどが判明しました。

この結果を受け、カンボジア産婦人科学会医師らから、「検診検査を行うだけではなく、必ずそれが精検・治療に繋がるような方策を立てなければ、検診は有益とされない」という発言が聞かれるようになり、どのような方策が有用であるかディスカッションを行うことができました。

(国立国際医療研究センター 春山 怜)



予演会の様子(2月末)

## 日本産科婦人科学会 - カンボジア産婦人科学会 プロジェクト会議

第73回日本産科婦人科学会学術講演会中、日本産科婦人科学会およびカンボジア産婦人科学会の理事の皆様による、プロジェクト会議が行われました。本事業は、2019年11月に開始されましたが、新型コロナウイルス流行の影響による各種制限(\*)に伴い、昨年度は日本から遠隔で技術支援を行いつつ、カンボジア産婦人科学会主導で事業活動を進めてきました。今年度も引き続き同様の状況が続くことが予想される中、両学会の事業として、事業の進捗と今後の計画を確認しました。木村理事長より、コルポスコピーの実践トレーニングを遠隔で支援する方法を提案いただきましたので、実施できるよう早速検討をすすめていきたいと思っております。

\*各種制限:

- 1) 小学校の休校措置の継続(教員への健康教育の実施に進むことができない)
- 2) 工場でのクラスター発生(工場従業員への健康教育も実施が困難)
- 3) 国立病院医師らのコロナ対応(ワクチンの全国導入開始に伴い、医師らが接種業務で多忙となっている)
- 4) 3か月未満の日本人専門家の渡航制限(2019年12月以降、現地での直接支援・指導ができていない)。

(国立国際医療研究センター 春山 怜)



### ～ ミニコラム ～

## カンボジアのコロナ流行と SCGO 事務所の移転

新型コロナウイルスの世界的感染拡大から約1年。今までカンボジアでは感染者数を比較的少なく抑えられており、当プロジェクトでも2月10日に200名を会場に集めてのアドボカシー会合を開催できました。しかし、そのわずか10日後、プノンペン中心部のナイトクラブでクラスターを発端に、カンボジア全土で感染が急速に拡大していきました。

政府はQRコードによる追跡システムの導入、集会の禁止、学校の閉鎖など対策を打ち出しましたが、感染者を減らすことはできず、カンボジア正月期間中である4月15日についてプノンペン市がロックダウンとなりました。不要不急の外出禁止、企業活動の禁止、酒類販売の禁止、店内飲食の禁止など、次々に出される前例のない規制に現地住民は文字通り混乱し、異様な雰囲気のカンボジア正月になりました。4月末現在もプノンペンのロックダウンは続いています。感染の拡大度合いによってレッドゾーン・オレンジゾーン・イエローゾーンに分けられ、イエローゾーンでは徐々に経済活動が再開されています。一方レッドゾーンでは依然厳しい外出規制が続き、政府はレッドゾーン内の住民に対して食料の配給やワクチンの接種などの援助を行っています。

新型コロナワクチンは、COVAXファシリティ(共同調達の国際枠組み)の恩恵により、3月頃から一般向け接種が開始されました。SCGO事務局員らは、4月上旬には2回目の接種を終えたようです。



大渋滞が名物のモニボン通り。車が走っていないのはかなりレアな光景です。



20時以降の移動禁止措置で、夜は車の通りがほとんどありません。



飲食店は閉店が目立ち通りは閑散としています。



レストランやアパートメントに入る際はQRコードで行動記録を登録する必要があります。

ところで、SCGO 事務局は前回プロジェクト(フェーズ 1)開始以来、国立母子保健センター(NMCHC)の別棟 1 階にオフィスを構えていたのですが、NMCHC の新型コロナウイルス感染症対応スペース拡大のため、4 月 10 日に急遽移転となりました。移転先は NMCHC 研修棟 4 階です。部屋は広くなりましたが今までのような理事長室や倉庫はなくなり、SCGO 事務局員は大々的な荷物の整理を行いました。



(プロジェクト調整員 佐野 志野)